犬と猫の麻酔管理

一次診療施設での周術期管理

～基礎から応用まで～

佐野　忠士

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 獣医麻酔学ユニット
酪農学園大学 附属動物医療センター 麻酔科 / 集中治療科 准教授

第４回　意外と難しい麻酔覚醒について

はじめに

麻酔の流れを考え、麻酔を実践し、全ての手技が終了すると、次に待っているステージが「麻酔覚醒」です。手術の手技も終わっているし、後は麻酔薬を切って覚ますだけ･･･と比較的「安易に」考えがちなステージですが、実は多くの注意が必要なステージでもあります。今回は、意外と難しい麻酔覚醒についてお話させていただきたいと思います。

麻酔覚醒時における危険度は？

前述のように、麻酔覚醒のステージは全身麻酔を行う目的であったメインの処置･手術などはすでに終了し、後は動物が麻酔から覚醒するのを待つだけなので、それほど危険度は高くないという印象があるのでは？ と思います。実際、ある特殊な状況（例えば、肥満の短頭種や、非常に高齢の症例など）以外で麻酔覚醒の時期にドキドキした、ヒヤヒヤしたという経験をお持ちの先生方やスタッフの皆様はそれほど多くないのでは？という印象です。

しかしながら、これまでにも多く引用させていただいている論文報告[1)]では、麻酔覚醒期における麻酔関連有害事象、すなわち麻酔事故は犬では麻酔中に生じる麻酔事故に次いで、猫では周術期管理において最も多く発生しているのです。

また、麻酔覚醒期の中でも麻酔終了直後～3時間後の間に麻酔事故は多く発生しており（**表１**）、「麻酔覚醒直後をどのように管理･看視するか？」は、安全な麻酔管理を行う上では非常に重要なポイントであることを忘れてはなりません。またここで生じている異常状態、死亡原因としては、呼吸器系の異常、循環器系の異常、呼吸器系と循環器系の異常となっており、麻酔管理中と同様、麻酔覚醒時においてもこれら「呼吸･循環」の監視が重要であることがわかります。

		犬（%）	猫（%）
麻酔前投与後		1	1
麻酔導入中		6	6
麻酔維持中		46	30
麻酔後	0～3時間	21	38
	3～6時間	7	5
	6～12時間	8	4
	12～24時間	9	7
	24～48時間	2	6

表１. 周術期における麻酔関連偶発症の発生時期